

アメリカの公立図書館における 初期の児童サービスについての批判的考察

久野 和子
愛知学泉短期大学

A Critical Study on the Initial Service to Children in American Public Libraries

Kazuko Kuno

キーワード: アメリカの公立図書館 American public libraries、児童サービス service to children、
日曜学校図書室 Sunday-School library、セツルメント・ハウス Settlement House

1. はじめに

アメリカの公立図書館は、イギリスと並んで、世界で最も早く理念的、制度的な発展を遂げ、先進的な図書館サービスを提供した。しかし、その起源は、成人会員によるソーシャル・ライブラリーであったため、サービス対象の想定は、成人に限定されていた。つまり、公立図書館では、当初、成人向けのサービスとは異なる特別な児童サービスの必要性について、まったく認識がされていなかったのである。公立図書館サービスの中に、児童サービスがしっかり位置づけられたのは、19世紀から20世紀への変わり目になってからであった。実に、公立図書館が制度的に確立された1850年代から、半世紀近くも経っていたのである。本稿では、その19世紀後半から20世紀前半の時代を中心に、児童サービスの初期における思想と歴史について、その源流を紐解き、土台となったものを見据えながら、概観していきたい。さらに、その中で、特定のサービス実践に対して、従来の説と異なる批判的な解釈、もしくは看過されてきた意義などについて再確認し、その再評価を試みたい。

2. 児童サービスのはじまり

アメリカで最初の児童図書館は、1803年、コ

ネチカット州のケレブ・ビンガム (Caleb Bingham) が創設した私設の図書館だと言われている。ビンガムは、ボストンで出版業と書籍小売商を営んでいたが、私財を投じて児童のための図書館を作り、9歳から16歳の子どもに本を貸出した。こうした個人による児童むけの小さな私設の文庫・図書館はニューイングランド地方にいくつか見られたが、必ずしも無料ではなかった。²⁾

一方、児童による公立図書館利用と無料サービスという新しい考えを初めて打ち出したのは、1876年、マサチューセッツ州クウィンジーの公立図書館の理事であったチャールズ・アダムズ (Charles Adams) である。彼は、学校教育の目的は自己教育ができる児童の育成にあると考え、そのためには図書館を利用した読書習慣の育成が重要であると提唱したのである。³⁾ それまで、公立図書館は、公教育終了後の成人に対して、学習の機会や情報提供を保障するものという考えが主流であったが、アダムスは、公教育課程における学習を支援するために、公立図書館を利用することを考え出したのである。しかし、若者に彼らの好む通俗書を許容して読書愛と読書習慣を育てようと考えたボストン公立図書館の理事ジョージ・ティクナー (George Ticknor) と異なって、アダムスは、娯楽や気休めのための軽読書本をおくべきではないと唱えた厳格な良書主義者であった。概して19世紀の教育主

義者は、良書主義者であり、無知な子どもや民衆を善導し良い本を読ませたいという共通した意識をもっていたのである。⁴⁾ また、アダムスと同時期に、ウィリアム・フレッチャー (William I. Fletcher) も、アメリカ図書館協会の 1876 年の報告書『アメリカ合衆国における公共図書館』に「公共図書館と青少年」という論文を掲載し、児童や青少年に対する公立図書館の役割を論じている。⁵⁾ また、すでに、1875 年に、キャロライン・ヒューインズ (Caroline M. Hewins) がコネチカット州ハートフォード市の青年図書館 (後に公立図書館になる) で、児童や青少年へのサービス活動を開始していた。⁶⁾ 理論や思想だけではなく、サービス実践も現場で始まりつつあったのである。ちなみに、現代の児童サービスは、ヒューインズを嚆矢とし、ムア (Anne Carroll Moore) (後述) によって基礎が固められたと言われている。⁷⁾

3. 児童サービスの直接的な土台となった社会的活動

アメリカ公立図書館における児童サービスの直接的な土台となった重要な社会的活動、施設として、次の 2 つのものが挙げられる。日曜学校 (Sunday School) の児童生徒のための図書室 (Library) と、セツルメント・ハウス (Settlement House) の活動である。

(1) 日曜学校図書室 (Sunday-School Library)

日曜学校とは、アメリカでは 18 世紀後半から始まり、日曜日または土曜日に地域の恵まれない児童青少年を集めて、食事や衣服を提供したほか、宗教教育、識字教育、道德教育を主におこなった施設である。アン・ボイラン (Ann M. Boylan) によると、日曜学校は、アメリカの開拓地で教会や学校といった施設ができる前の教育や宗教の中心としての役割を果たし、地域社会の人々が、貧富や性別や人種を問わず子弟を参加させ、広く全国に普及していった。⁸⁾ 当時、実質的に学校や教会として機能していた日曜学校は 1832 年には、全米で 8,268 校、そして、1875 年には 69,509 校が設置され、そのほぼすべてが図書室を持っていたと言われている。⁹⁾

赤星隆子は、19 世紀のアメリカの日曜学校図書室の歴史をまとめ、その意義と役割について論じている。¹⁰⁾ 従来の研究では、日曜学校図書室の位置づけは、各地にあった数の多さ、無料で読書の機会を提供し読書の普及に役立ったことなどを根拠に、公共図書館の先駆的存在とする見方をとっていた。それに対して、赤星は、そうした歴史的存在としてだけではなく、アメリカの児童サービスの土台を形成し橋渡しになるという重要な役割を果たしたとして、日曜学校図書室の再評価を試みている。その主な主張をまとめると次のようになる。¹¹⁾

1) 選定基準の明文化と非宗教性

日曜学校図書室の主な目的は、宗教教育のためと言うより、児童や家庭における読書そのものの普及に主眼が置かれていた。したがって、その選書についても、以前信じられていたように宗派や宗教よりも、児童文学としての評価に基づいた選定基準を作成し、それに沿って厳密に検討していた。それは、選書委員会の選択方針からも明らかになっている。

2) 児童向け図書の出版と提供

日曜学校の設立と維持をはかった米国日曜学校連合 (American Sunday-School Union, 以下 ASSU と略記) は、出版委員会を組織し、図書や雑誌を編集発行した。出版点数、印刷部数とも非常に多く (1868 年までに計 750 点を出版し、数千万部印刷された)、また非常に安価で日曜学校に頒布され、多くの子どもが同じ本を同時に読むことができた。内容については、宗派の枠をこえていたため、宗教色はそれほど強くなく、作品内容についての基準も作られていた。従来は教訓的で陳腐で粗悪な本が作られていたと言われていたが、優れた本も相当数あったことが明らかになっている。そして何と言っても、ASSU が、あらゆる階層の子どもたちに多くの本を無料で提供し、読書の機会を与えた功績は高く再評価されるべきである。また、児童図書出版の発展に寄与した功績も見逃せない。

3) ブックリストの作成

同時代の図書館関係者から最も注目されていたのは、婦人選書委員会の作成したブックリストである。前述の公立図書館員ヒューインズも

ブックリストを作成しており、児童サービス史の中で、最初の重要な仕事として評価されている。しかし、実は日曜学校ですでにそれ以前に始められ、長年にわたって使われていたことを再確認するべきである。

以上の赤星の指摘は興味深いものである。日曜学校図書室は、教会や学校教育の機能を補完したばかりでなく、児童図書館として重要な役割を果たしていたと考えられる。そして、歴史的に公立図書館の児童サービスの母体となったと言えるわけで、これからさらに評価、研究されるべきだろう。

(2) セツルメント・ハウス (Settlement House)

セツルメント運動は、一方的な物的支援しか考えない慈善活動に対する批判の中から生まれたもので、「貧困問題の社会性を認識して下層社会であるスラム地区などに知識階級に属する人々が住み込み、スラム住民との人格的接触を通して住民の教養や生活改善を行うとともに、地域全体の生活環境の改善に取り組み、必要な場合は制度の充実を社会に要求していく社会改良の一つ」¹²⁾である。1884年、サムエル・バーネット (Samuel Barnett) 夫妻を中心に、英国ロンドンの東部貧民街に建てられた「トインビー・ホール」が、世界最初のセツルメント・ハウスと言われている。

アメリカでは、1889年に、ジェーン・アダムス (Jane Addams) が、友人とともにシカゴのスラム街に開設した「ハル・ハウス」が有名である。1890年代のはじめには、アメリカの主要な都市にはすべて、影響力のあるセツルメント・ハウスが設立され、そこでは、近隣の人々が集い、社交的な催しや教育講座などが盛んにおこなわれていた。当時のアメリカのセツルメント・ハウスの活動の特徴としては、「移民に対してその価値を尊重する体系的なグループ・プログラムをもったこと、児童労働禁止、非行防止のためのグループ活動を含む児童福祉分野を担ったこと、労働運動をはじめとした社会改良志向性を有していたこと、平和と福祉を一体として捉えようとしたこと、そして女性たちによる活動であったことがあげられる。」¹³⁾

実は、児童サービスの歴史においては、セツルメント・ハウスの影響は看過されることが多

いが、ローズマリー・R.ドゥモン (Rosemary R. Du Mont)は、その著『Reform and Reaction The Big City Public Library in American Life』の中で、セツルメント・ハウスについて再評価をおこない、公立図書館の児童サービスは、セツルメント・ハウスの理念と伝統を受け継いでいると明言している。¹⁴⁾それはつまり、次のことを意味する。当時の「図書館員は、狭い意味で、子どもの図書館利用と良書の評価に心を砕いていたが、より広く、より基本的な関心として持っていたのは、子ども一人一人が道徳的、知的に発達を遂げること、そしてその結果、地域への貢献がその子どもによってもたらされること」であった。つまり、図書館の児童担当者は、セツルメント活動家同様、女性が多くおり、児童福祉的な活動を担っていた。彼女たちが、読書を通して子どもたちに一番に教え込もうとしたのは、知識や読書習慣だけでなく、「道徳、正義、博愛、献身」などの人間としての美德だった。さらにそれを身につけた子どもの成長によって、究極的に地域全体の「平和、繁栄、進歩」がもたらされると信じていたのである。

(3) 日曜学校とセツルメント・ハウスについての考察

日曜学校もセツルメント・ハウスも、一番大きな目的は、読書教育や図書の提供ではなく、他にあった。前者は宗教教育、そして、それを基盤とした道徳教育であり、後者は、社会福祉、つまり、住民の教養や生活の改善、個人や社会の道徳の向上、貧困問題の解決、平和などを目指していた。そして、公立図書館の児童サービスの開始と普及によって、両者は児童への図書貸出しサービスを縮小・廃止していく。

両者の活動において、共通するところは、子どもへの本の貸出しによって、家族ぐるみ、地域ぐるみで読書と教育を推し進め、より効果的に最終的な目標を達成しようとしたことである。また、負の部分で共通していたのは、図書の選書や適切なサービスのできる専門職がいなかったこと、すぐれた図書選択の方針や基準の設定と共通理解が進んでいなかったことなどがあげられる。¹⁵⁾これは現在の図書館においても重要な課題となっている。

19 世紀後半から 20 世紀前半に児童サービスが急速に進化し、すみやかに受け入れられた背景には、日曜学校やセツルメント・ハウスで、本に親しみ、読書の楽しみを知っていた児童青少年とその親たちの存在があったことを再確認することは重要である。

4. 公立図書館における児童サービスの開始

1890 年代には、アメリカの各主要都市の公立図書館において、児童サービスが開始され、1900 年代に入ると、独立した児童室は、公共図書館の絶対不可欠な部分と考えられるまでになった。1913 年、ALA 会長を務めたこともあるアーサー・ボストウィック (Arthur Elmore Bostwick) は、図書館の児童サービスの歴史について検討し、児童サービスの発展段階を次のように示している。¹⁶⁾

第 1 段階：成人には提供しない子どものための特別なサービスが用意される。

第 2 段階：独立した児童室が設置される

第 3 段階：すべての児童サービスが一つの管理本部のもとで統括される。

さらに、オリバー・ギャルソー (Oliver Garceau) は次のように述べている。¹⁷⁾ 「児童サービスの発展は、図書館にとって、ただ児童室が開設されたこと以上の意味があった。図書館員たちが訓練されて、児童の読書を指導し、親に助言を与え、お話を語り、子どもが想像世界に生きる励ましになる環境を作り出すようになったのだ。」たしかに、児童サービスの初期の時代から、多くの優れた実践に積極的に取り組んだ児童図書館員が数多く誕生している。その中でも大きな功績を残したのが、前述の児童サービスの先駆者ヒューインズ、長年ニューヨーク公共図書館の児童部長を務めアメリカの児童書評の基礎を築いたアン・キャロル・ムア (Anne Carroll Moore)、独立した児童室と児童用の家具をしつらえたミネルバ・サンダース (Minerva Sanders)、ムアの薫陶を受けカナダで初めての児童図書館員となったリリアン・スミス (Lillian Smith) などである。

5. 児童サービスの功績と限界

本稿においては、上述の女性児童図書館員の個人的な華々しい功績には触れない。代わりに一人の男性図書館員の取り組みに着目し、その実践を通して、当時の一般的な児童サービスの功績と限界について検討する。

(1) ウィリアム・ブレットの功績

1885 年にクリーブランド公立図書館長に就任したウィリアム・ブレットは、開架制や主題別部門制の採用など先進的な取り組みをしたことで有名であるが、彼は児童サービスの導入にも非常に積極的に取り組んだことでも知られている。ブレットは、多くの児童書を積極的に購入し、館内に独立した児童室を設けた。さらに多数の児童分館の設立、ホーム・ライブラリー支援、学校へのサービス、ストーリーテリングの実施、児童図書館友の会の設立など、画期的な取り組みを、めざましい勢いで進めたのである。¹⁸⁾ 児童にも成人と同じ権利を可能な限り与えるという当時としては新しいブレットの理念は、高く評価される。

特に、ブレットの数々の功績の中でも、1901 年に、蔵書冊数 1 万冊の児童室を作り上げたという功績¹⁹⁾ は、驚嘆に値する。現在の日本の公立小中学校の学校図書館でさえ、蔵書冊数 1 万冊を超えるところはほとんどないことを考えると、当時、ASSU の出版した廉価本を多く購入していたにせよ、複本が多かったにせよ、1 万冊という数字は当時としては膨大だったと言えるだろう。

(2) 児童サービスの隆盛を支えた社会的背景

このように、公立図書館における多様な児童サービスや、児童書の膨大な蔵書を可能にした当時の社会的、経済的背景について、考察してみたい。まず、当時ジャーナリズムが隆盛期を迎え、出版活動が盛んであったことが第一にあげられる。ASSU が児童書を多数出版したことから、それに刺激を受け、児童書の出版も当時飛躍的に拡大した。それを支えたのが、好調な経済状況（大恐慌まで）と、アメリカ児童文学の「黄金期」であった。この時代は、児童図書館の間に比類なき名著が続々と出版され、そうした本が豊かに揃えられた読書環境の中で、児童

サービスが積極的に提供されたのである。

さらなる背景として挙げられるのは、カーネギーの莫大な寄付、自治体の理解と予算支給、寄付やボランティアによる地域住民の支援と協力である。とりわけ、後者の果たした役割は大きく、当時の大都市と近郊の公立図書館の活発な児童サービス活動を思想的に支えたのは、図書館に対する住民の支持と理解、教育機関としての図書館に対する社会からの期待、家庭および地域の児童教育への関心の高まりであった。ブレットが主導した児童図書館友の会の初年度会員数が、1万4千人だったという事実²⁰⁾もこれらの状況を裏付けていると言えよう。大都市やその近郊に住む給与所得者が、家庭を持ち、経済的余裕のある中で、子どもへの教育に強い関心を持つようになり、児童書および児童サービスへの大きな需要を産んだのである。また、児童図書館員もこの期待に十分にこたえ、学校と連携して、積極的に授業支援に取り組んだり、図書館で様々な教育活動をおこなったり、教育機関としての役割を積極的に果たした。また、友の会では、「美しい心、美しい手、美しい図書」を標語として掲げ、適切な行動基準と、公共施設としての図書館に対する社会的義務を熱心に子どもに教え込んだのである。²¹⁾

(3) 隔離された児童室

ブレットは、アダムス同様、良書主義者であり、軽読書本などの悪書による青少年への悪影響を恐れ、検閲を図書館員の義務と考えていた。これは当時としては一般的な考え方であった。1900年にアメリカ図書館協会が作成した小冊子は、図書館の教育的役割、低俗な娯楽に対抗して健全な娯楽を与える役割、悪書追放の役割を強調していた。²²⁾

実は、ブレットが、独立した児童室を設置した背景には、児童や青少年に対しての良書選択と資料検閲という考えがあり、隔離という意図があったのである。²³⁾ つまり、独立した児童室を作ることによって、青少年を隔離し、図書館の開架書架に並んでいる成人向けの図書から遠ざけようとしたのである。従来の開架制であれば、青少年や児童が、図書館で成人向けの小説などを目にしたり、手に取ったりする心配はなかった。しかし、ブレットは自身が採択した開

架制によって、初めてその心配に直面したのである。

独立し、隔離された児童室の設置は、開架制が引き起こした問題に対する必要不可欠な問題解決策であったとも考えられる。そして、厳しい検閲を通して、道徳的、教育的と判断した児童図書のみを、隔離された児童室で提供したのである。また、当時ボストンやセントルイスなどでも児童室が設けられたが、やはり児童サービスの重要性という意味と成人資料からの隔離という意味との両方の側面を持っていたと川崎は指摘している。²⁴⁾

(4) ストーリーテリングの功罪

この頃公立図書館で盛んに行われるようになったストーリーテリングについても、その功罪が指摘されている。²⁵⁾ ストーリーテリングは、ただ児童におもしろい話を聞かせたというだけではない。それは、アメリカの公教育を受けていない移民の親を持つ児童たちに、図書館員らが、親に代わってアメリカ的教育を施そうとした側面を持っている。

つまり、ストーリーテリングやホーム・ライブラリーなどのサービスは、「社会福祉的な側面とアメリカ化の側面を強固にもち、道徳の向上や好ましい習慣の形成が、読書自体よりも強調された」²⁶⁾のである。これは重要な指摘である。ストーリーテリングは、アメリカ社会が子どもに何を期待するかを、物語を通して伝えることに、その最大の意義をおいたのである。そこには、児童の多様な家庭的、文化的、言語的なバックグラウンドへの配慮や、児童の自由な読書への尊重がほとんどなされていなかったのである。

最初の時期は、図書館は、移民たち自身の文化の維持も支援しようとしていた。しかし、結局は、他国からの新参者を出来るだけ早く同化させるというニーズの方が、移民の自己認識や民族性の維持よりも優先されたのである。他の教育者と同様に図書館員も、自分たちのアメリカ流生活様式の価値と制度を守ることが望んだのである。特に、英語を話さない貧しい移民が住む地区にあった児童分館やホーム・ライブラリーなどは、そのようなアメリカ化の機関として大いに機能したのだった。つまり、ストーリーテリングや児童書の提供によって、アメリカ

的な文化、言葉、道徳、習慣などを、巧みに児童に教え込んでいったのである。おそらく、児童サービスを実際に提供していた図書館員やボランティアたちは、善意と誇りをもって取り組んでいたであろうし、決して計画的に「アメリカ化」を目論んでいたわけではないだろう。しかし、無意識的にしろ、善意に基づいていたにしろ、アメリカ主流社会の望む理想的な国家像や国民像の形成を児童に巧妙に植え付けていた事実是否定できない。このように当時、公立図書館は実質的にアメリカの移民同化政策の一翼を担っていたと考えられる。

6. おわりに

以上、アメリカの19世紀後半から20世紀前半の時代を中心に、児童サービスの初期における歴史について概観した。まず、児童サービスを生み出す母体となった日曜学校図書室と、セツルメント・ハウスの活動について、その意義を再確認した。両者のおかげで急速に普及した公立図書館の児童サービスは、当時の社会・経済的状况が追い風になり、優れたサービスと豊かで質の高い蔵書を子どもたちに提供することができた。公立図書館は、児童、青少年に知識や情報、適切な公共マナーや道徳を教える教育機関としても期待され、機能することとなった。一方、独立した児童室の設置や、ストーリーテリングについては、批判的な解釈もある。こうしたことを過ぎ去った歴史とするのではなく、その思想や理念、そして果たした役割などについてさらに批判的に再検討、もしくは再評価し、現在そしてこれからの児童サービスのあり方を深く見つめ直すべきであると考え。

引用文献・注

- 1) ベンジャミン・フランクリンが1731年創設した会員制のフィラデルフィア図書館会社が最初のソーシャル・ライブラリーと言われる。その後、会員制のアセニウムや、勤労者向けの商事図書館、青年会図書館、職工学校図書館などが作られた。
- 2) 高鷲志子:『子どもと本の架け橋に: 児童図書館員に

できること』角川学芸出版(2006)

- 3) 川崎良孝:『図書館の歴史アメリカ編 増訂第二版』, 日本図書館協会, 145 (1995)
- 4) 同上, 145-152
- 5) 次の文献の記載から引用した。日本図書館協会児童青少年委員会、児童図書館サービス編集委員会編:『児童図書館サービス1: 運営・サービス論』日本図書館協会, 30-31(2011)
- 6) 同上, 30-31
- 7) 赤星隆子:『児童図書館の誕生』理想社, 7 (2007)
- 8) Anne M. Boylan:『*The Sunday School: the formation of an American institution 1780-1880*』, Yale University Press, 54 (1979)
- 9) Frank Kellerf Walter: A poor but respectable relation—the Sunday-School library, *Library Quarterly*, 12, 731-739(1942)
- 10) 前掲書 7)
- 11) 前掲書 7), 12-34
- 12) 菊池正治:セツルメント運動の生成, 清水教恵・朴光駿編著『やわらかアカデミズム・〈わかる〉シリーズ よくわかる社会福祉の歴史』ミネルヴァ書房, 48-49(2011)
- 13) 木原活信: ハル・ハウス, 山縣文治・柏女霊峰編集委員代表:『社会福祉用語辞典〔第9版〕』, ミネルヴァ書房, 314(2013)
- 14) Rosemary R. Du Mont:『*Reform and Reaction The Big City Public Library in American Life*』, Greenwood Press, Inc., 87(1977)
- 15) 前掲書 7), 35.
- 16) Arthur E. Bostwick: Volume of Children's Work in the United States, *ALA Bulletin*, 7, 287(1913)
- 17) Oliver Garceau:『*The Public Library in the Political Process*』, Columbia University Press, 48(1956)
- 18) 前掲書 3), 158
- 19) 同上, 156
- 20) 同上
- 21) 前掲書 14), 90
- 22) 前掲書 3), 158
- 23) 同上, 159
- 24) 同上
- 25) 同上
- 26) 同上